

近世節用集書名変遷考

— 字数と基称 —

佐藤 貴裕

はじめに

近世節用集の書名は実に多様だが、その諸特徴には時期による興廃がある。この点、近世節用集が規模・内容・検索・構成などで多様ながら、時期による興廃のあることに似ている。そこで、二つの事態の関係を検討することが求められるが、関係の有無にかかわらず、検討結果はそのまま記述的研究に資することになる。

一方、書名という対象には、節用集研究から切り離しても固有の価値がある。近世における命名・商品名のまとめた資料になりうるし（佐藤二〇〇一）、語構成論的に検討することも考えられる。たとえば「頭書増補節用集大全」と「大全早引節用集」を比較しただけでも、〈大全〉の出現位置の異なりや、それにとまなうニュアンス差、〈節用集〉の位置による重みの異なりなど、追究したくなる事例がすぐにも見出せるのである。

右のような必要性和可能性にかんがみ、本稿では、近世節用集の書名史研究の基礎部分について検討を加えようと思う。具体的には、字数などの客観的な部分や、基称をめぐることがらを中心に検討することとする。

資料は、稿末の書名一覧で、易林本以降、慶応三年までのもの六〇八本を採った。刊行年が確認できる現存書を主とするが、周到な調査による目録・論考や、刊行書にもとづく江戸本屋仲間の販売許可控え（割印帳）からも採った。なお、古書籍商の販売目録などから採ったものなど、現存本による確認が必要なものも一部ある（*印）。刊記が脱落したものは、武鑑・年代記・暦日関係などの付録記事の年記により、おおよそのところに配した（?印）。また、類似書間の精密な本文検討により刊年がほぼ確定できるものも同様に扱った。ただし、検索法・版式・体裁などからある程度推測できるものも一五本ほどあるが、確定にはいたらないと考え見送った。

本稿での一本の認め方として、異称のものを一本とするので、いわゆる改題本も一本として採っている。また、別の年に再版された同名書も一本として採った。他書と合冊されて別の年に出版されたものも同様である。同版ながら判型が異なるものや、料紙の厚薄の別、それにともなう冊数の異同があるものは一本とは認めなかった。

なお、一七世紀末ごろ以前の諸本ではやや厳密に異本を捉えている。たとえば、易林本で原刻・平井版・平井別版・小山版をそれぞれ一本とし、草書本の三種も同様に考えた。さらに『三休節用集』（元和・寛永頃版）のよいうに一部別版本による部分を含むものも別途一本とした。^{（注1）} 同版でも別の書肆による再版は同年刊行でも一本とした。これは、元禄年間に重版（無断複製）・類版（意匠盗用）が犯罪として公認される^{（注2）} 以前の状況を考慮してのことである。逆に、これ以降の諸本については書肆の異同や版本の小異にはこだわっていない。

以下では、近世全体を二五年ごとに分けて一期とし、これを単位として考察する。なお、最初の二五年には易林本などを含み、最終の期は二五年に満たない一八年となった。

書名は原則として内題を採った。正式名称と捉えられ、伝存過程での脱落も少ないからである。なお、内題の

表一

平均	合計	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	
3.3	14								2		12	~1625
5.2	22						7		10		5	~1650
6.5	25				1		17		7			~1675
8.2	69	1	2	1	41	2	12	3	7			~1700
8.1	86		3	4	27	34	10	2	6			~1725
7.8	53		2	6	6	16	17	3	3			~1750
6.7	66		1	1	8	7	24	4	20	1		~1775
6.1	60			2			28	1	29			~1800
6.5	75		1	2	3	9	29	1	26	4		~1825
6.1	75		2	2	4	4	16	2	41	4		~1850
6.9	61		3	1	3	11	23	4	15	1		~1868
6.9	607	1	14	19	93	83	183	20	166	10	17	合計

ないものは外題・序題などで代用したが、それでも書名を決定できないものが二本あった。また、内題には、本体部分に付随する角書・尾書（番書）の存することがあるが、問題を単純化するために対象としなかった。

二 字数の変遷

時期・字数ごとに集計したのが表一である。各期の最高値と近似の次点を太線・二重線で強調してある。

下部合計欄によれば奇数字名の多いことが知られる。《節用集》に《真章》《大成》などの二字要素が修飾・補完するからである。偶数でも八字名が八三本を数えるが、大半は一八世紀前半に集中し、当該期間内の最多本数ないし次点も八字名である。このように一八世紀前半だけに特異な事象が見られることが、以下にも確認される。

さて、一七世紀では、字数が段階的に増え、最後の期間では九字名が他を圧し、平均値は近世中最高の八・二字に達する。書名の要素は「頭書増補節用集大全」のよ

うに体裁や増補など直接的・実際的なものが主である。一八世紀前半は、平均字数で八字前後であり、最多本

合計	その他	節用	節用集	
14			14	～1625
22			22	～1650
25			25	～1675
70	2	1	67	～1700
87	3	43	41	～1725
53	4	35	14	～1750
66	8	24	34	～1775
60	12	17	31	～1800
75	6	27	42	～1825
75	3	14	58	～1850
61	4	11	46	～1868
609	42	172	394	合計

表二

表二によれば、近世全体を通して《節用集》が優勢であり、短縮形の《節用》がこれにつぐ。また、《節用集》を用いない書名が延べ四二本あるのは不審だが、古本節用集にも例がある。が、別途別稿で触れられれば

三 基称の興廃

これらの諸本は、たとえば『大極節用国家鼎宝三行綱目』は篆書体も表示しており、『和漢音釈書言字考節用集』は合類体で詳細な漢文注までもつ近世節用集の白眉である。『大広益字尽重宝記綱目』は『合類節用集』を一冊に圧縮、行書表記としたもので、男・女を冠したものは特定用途向けであろう。つまり、他の節用集とは異なる性格を持つており、それゆえに近世を通じて再版される独自の価値があったもののようである。そもそも字数の多い書名はたやすく発想も命名もされない。そこで右のような独自性の表明として書名にも注力した結果、字数を要したとすれば穿ちすぎだろうか。《国家・鼎宝・三行・音釈・書言・字考・如意・男・女》などが他の節用集には見られない独自要素であることから書名への注力は窺われるところである。

と思う。

《節用集》優勢の近世にあつて、一八世紀前半は《節用》が優勢となる特異な時期である。《節用》は、一七世紀末には一本しかないが、次の二五十年間では一気に四三本に増え《節用集》を上回る。ただ、《節用集》もほぼ同数の四一本あるので、《節用》の増加も驚くにはあたらないといえる。ただ、これにつづく二五年で《節用》が三五本となって《節用

数も七～八字で、近世を通じて字数の多い時期が続く。ただ、最多本数は九字名から八字名・七字名に落ちていく。後述のように《節用集》よりも《節用》を多用し、直接的・実的な要素を多数重ねるよりも修飾的・印象的な要素を的確に配置するような作法の変化もあったか。

一八世紀後半では、平均字数で六字台、最多本数も七字・五字と急速に減少して、一八世紀前半の反動のようでもある。ただこの減少は、一七世紀前半ほどまでには至らぬまま、安定していく。このように見れば、字数の増加が頂点をむかえた一七世紀末・一八世紀前半は特異な時期であることになろう。

個々の事例を見ていく。一〇字以上の書名は延べ三四本あるが、改題を含め、再版が多いことが注意される。

一二字「大極節用国家鼎宝三行綱目」(一六九〇?)

一字「増補頭書両点二行節用集」(一六八一、一六八七、一七二七)

「大益字林節用不求人大成」(一七二七)

「和漢音釈書言字考節用集」(一七二七、一七六六、一八一八、一八四〇、一八四六、一八五六*、一八六〇、

一八六一)

「女節用集文字袋家宝大成」(一七二〇)

「女節用集器囊家宝大成」(一七四三)

一〇字「新大成増字万宝節用集」(一七〇〇)

「大万宝節用集増字大成」(一七〇四、一七一〇此頃)

「大広益節用不求人大成」(一七二五?、一八二七)

「男節用集如意宝珠大成」(一七二六、一七三六、一七六九、一八〇一此頃*)

「大万宝節用集字海大成」(一七三三、一七三八、一七四〇、一七四七)

「大広益字尽重宝記綱目」(一七四九、一七八一、一七九九)

「大万宝節用集字海大成」(一八二四) 「大日本永代節用無尽蔵」(一八四九、一八六四)

合計	その他	後部多	前部多	前後同	
14	12		2		～1625
22	5		16	1	～1650
25			25		～1675
70	2	2	64	2	～1700
87	3	58	19	7	～1725
53	4	39	9	1	～1750
66	8	30	25	3	～1775
60	12	17	29	2	～1800
75	6	32	33	4	～1825
75	3	12	59	1	～1850
61	4	11	44	2	～1868
609	59	201	325	23	合計

表四

合計	節用		節用集		
	非末尾	末尾	非末尾	末尾	
14				14	～1625
22			1	21	～1650
25				25	～1675
68	1		32	35	～1700
84	43		28	13	～1725
49	35		9	5	～1750
58	24		11	23	～1775
48	17		2	29	～1800
69	26	1	12	30	～1825
72	12	2	4	54	～1850
57	11		5	41	～1875
567	169	3	104	290	合計

表三

集》を圧倒し、一八世紀前半における《節用》の増加傾向がピークに達することになる。

一八世紀後半以降では再転して《節用集》が優勢になる。結局、《節用》の最盛期はわずか五〇年ということになるが、書名要素として広くおこなわれたことは確認でき、それ以降も絶えてなくなることはなかったことを重視してもよからう。もちろん、なにゆえ《節用集》が復興し安定したかを検討することも重要であり、そのことにより、《節用》の短命の要因にも接近できるはずである。合せて後に考察したい。

個別例として一件のみ触れる。一七世紀においてただ一本、《節用》を用いるのが、『大極節用国家鼎宝三行綱目』（二六九〇）である。この書は『頭書大益節用集綱目』の改題本であり、一六九〇年かとした刊年も同書中の記事によるので不安がある。《節用》を用いることや、修飾・補完する要素の意味範疇からしても一八世紀前半での刊行がふさわしいが、前節で触れたように、本書は最多字数の書名でもあるから、平均字数・最多本字数数ともに最高となる一六七五～一七〇〇年中にあることは真にふさわしく、象徴的な存在とすら言いうる。書名の検討からは、推定刊年への疑義は晴らすことは、この書についてはできないことになる。

四 基称の位置

表三からすると、《節用集》は書名末尾に現われ、《節用》は末尾にはまず現れない。逆に、末尾ではない位置に《節用》は現われ、その場合は《節用集》よりも多くなる。

時期ごとに見れば、一七世紀中では《節用集》が末尾にあることが普通である（単称の「節用集」も含める）。これが一八世紀には一挙に非末尾の《節用》が優勢となるが、これは前節の検討結果からも予想できることである。単に「短縮形《節用》は末尾にこない」との情報が加わったにすぎないからである。

が、この「末尾にこない」という特性は、まず本来形《節用集》が獲得したものである。一六七五～一七〇〇

年に末尾三五本に対して非末尾が三二本あるのだから、数値上は一七世紀末の《節用集》のありようが、次期における《節用》の非末尾化を準備したと説めることになる。ただ、末尾から解放されたことが短縮形を生んだのか、短縮形の誕生が非末尾化を加速したのかは即断できない。

一七世紀末に基称《節用集》の位置を末尾から動かしたのは《大全・綱目・大成》などの要素といえよう。「頭書増補節用集大全」を例にとれば、修飾要素《頭書・増補》が直接的・具體的であるのに対し、《大全》は漠然と安心感を訴えるだけのようである。指摘するにとどめるが、一八世紀前半には多様なイメージの修飾要素・補完要素が増えるのだが、その初発のものとして《大全》などがあるのかもしれない。

なお、一八世紀後半では、非末尾《節用》が有力ながら、一七五一～七五年には末尾《節用集》がわずか一本差にせまり、次の二五年では

逆転して、これ以降、末尾「節用集」がふたたび安定的に用いられることになる。

基称の位置にかかわって、その前後要素の長さにも注目しよう。表四には、基称の前後要素の字数を比較してまとめている。「その他」は、単称の「節用集」、「節用(集)」を含まないもの、書名の特定できないものである。前部要素と後部要素とが同字数になることはまずなく、前部要素の字数が多い書名が最多かつほぼ近世全期を通じて見られる。これに対して後部要素の字数の多い書名が、一八世紀前半とこれにつづく一七七五年までの七五年間では優勢になっている。しかも、一七世紀までと一八世紀前半とは、ほぼ正反対の分布を呈することになった。このような観点からも、異質な事象が一八世紀前半に突如優勢となる動きが確認できることになった。そうした事象は、一八世紀後半にはすみやかに衰え、一九世紀には落ち着きを見せることになるが、この点も前後要素の字数差はあてはまることになる。

おわりに

一八世紀前半に新たな事象が流行し、その後半には終息するという動きが、右の諸点には共通して存した。それだけに、背後には流行をうながす大きな力と、それを鎮静化する力のあることが予想されるのである。

まず、一八世紀前半の「力」とは、元禄一一(一六九八)年に発布された重版・類版の禁止令であろう。広く複製行為を禁じたので、新刊書には、先行書に抵触しない工夫、端的に言えば新規性が求められたのである。その簡便な方法として、節用集では日用教養記事を付録することが行われたと考えられ、^(注3) 実際、一八世紀初めごろには、付録内容の新旧交替が確認されている(石山秀和一九九八)。往来物・教訓書・『百人一首』などで同様の動きをとるのも(鍛冶宏介二〇一〇)、やはり重版・類版禁止令の影響と見るべきで、その強大さが知られる。

このように強力な法令が、近世節用集の書名にも影響したのであろう。新規性を主張するには、その書名を

えることがまず効果的だからである。そして、書名を変える手法もいくつか編み出され、字数の増加や基称の短縮、そしてその位置の変更をきたすにいたったと考えられるのである。

一方、一八世紀後半以降の鎮静化には、早引節用集の急速な流行が考えられる(佐藤一九九〇b)。その影響力も大きく他の書肆を刺激して新たな検索法の考案を呼ぶほどであり(佐藤一九九〇a)、一九世紀には主流格の節用集として定着するものである。その書名は「大全早引節用集」のように、「節用集」を基称として末尾に配し、その前部にのみ修飾要素がくる、一七世紀的なものである。

以上、近世節用集の書名において、特異な事象の集中する時期として一八世紀前半が捉えられたが、これは、出版制度の変化と近世節用集自体の展開により無理なく解釈できるものと思われる。

注

- (1) 草書本については山田忠雄(一九六四)、「三休節用集」については佐藤(二〇一〇)参照。
(2) たとえば「倭節用集悉改竄」(一八一八)には、付録の「改正御武鑑」に鎖印の有無で二種あり、存するものではない。他に「御公家鑑」中の「閑院宮」に実名などが存しないものと補われたものがある。こうした差に依って別本とすることはしていない。

- (3) 一方、教養記事の版元と係争する矛盾も生じたが(佐藤一九九五)、それほどまでに新規性が求められたのであろう。

参考文献

- 石山秀和(一九九八)「節用集の出版と普及過程」『立正大学大学院年報』一五
鍛冶宏介(二〇一〇)「江戸時代教養文化のなかの天皇・公家像」『日本史研究』五七一
佐藤貴裕(一九九〇a)「近世節用集における引様の多様化について」『国語学』一六〇
佐藤貴裕(一九九〇b)「早引節用集の流布について」『国語学』一六〇

佐藤貴裕 (一九九五)「近世節用集版權問題通覧——元禄・元文間——」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』四四—
 佐藤貴裕 (二〇〇二)「近世節用集書名変遷考——一七〇〇年前後の転換期まで——」『国語語彙史の研究』二〇
 佐藤貴裕 (二〇一〇)「横本『二体節用集』の研究課題」『国語語彙史の研究』二九
 佐藤貴裕 (二〇一一)「節用集と近世社会」『近世語研究のパス・スペクティブ』笠間書院
 山田忠雄 (一九六四)「草書本節用集の版種」『ビブリア』二九

〔付記〕 書名一覧の作成に御協力くださった各位に謝意を表す。なお、本稿は、近代語学会研究発表会 (二〇一〇年六月二六日、白百合女子大学) の発表原稿の一部に依る。また、科学研究費補助金・基盤研究 (C)「近世辞書の学際的・社会的的研究のための調査と基礎情報」の収集、および基礎研究 (A)「『書物・出版と社会変容』研究の総合化に向けて」(若尾政希) の成果の一部を援用した。

近世節用集書名一覧

* 確認調査を必要とするもの ? 刊年を推定したもの	二体節用集 (嘉久版再版)	1629	真草二行節用集	1683	頭書増補節用集綱目	1688
「此項」刊年をより広い幅で推定	二体節用集 (書肆名不記)	1629	二体節用集	1684	頭書増補節用集大全	1688
○ 合類型 (意義×頭字イロハ)	二体節用集 (同別版部分)	1629	真草二行節用集	1684	驚頭節用集大全	1688
△ 部分的なイロハ二重検索	節用集 (中野版二巻本)	1629	真草二行節用集 (増補版再版)	1685	頭書大成節用集*	1688
■ 早引 (頭字イロハ×仮名数)	二体節用集 (杉田版)	1632	真草二行節用集 (同書肆別除)	1685	頭書増補節用集綱目	1689
◆ 頭字イロハ×仮名数の偶数奇数	二体節用集 (中野版三巻本)	1632	真草二行節用集	1685	頭書増補節用集大全	1689
▲ イロハ二重検索	二体節用集 (刊年数字手書)	1633	増補二行節用集*	1670	二体節用集	1690
▼ 特殊假名 (濁音・撥音・長音)	節用集* (二巻本・奥野目録)	1637	二行節用集 (孟春松会版)	1674	大極節用集 (綱目)	1690
▽ その他の新規検索	真草二行節用集 (西村版)	1638	二行節用集 (陽月近江屋版)	1674	頭書増補節用集大全 (大野木)	1691
☆ 3万語以上所収	真草二行節用集 (書肆別除版)	1638	真草増補節用集	1675	頭書増補節用集大全 (同別版)	1691
() 角書。同定に必要なもののみ	二行節用集*	1639	増補二行節用集	1676	頭書増補節用集大全 (松会版)	1691
() 注記。同定に必要なもののみ	節用集	1644	頭書増補二行節用集	1679	頭書大成節用集	1691
節用集 (易林本原刻)	真草二行節用集 (仲秋版)	1646	合類節用集 (外題)	1680	頭書増補節用集大全 (須原版)	1692
節用集 (同平井版)	真草二行節用集 (仲冬版)	1646	新刊節用集 (外題)	1680	頭書増補節用集大全 (松会版)	1692
節用集 (同平井別版)	増補節用集大成*	1646	頭書増補二行節用集	1680	大益字尽重宝記綱目	1693
節用集 (同小山版)	真草二行節用集	1650	輪島節用集身宝大成	1680	大益字綱目	1693
節用集 (寿蘭本)	真草二行節用集 (孟秋版)	1651	増補頭書西点二行節用集	1681	頭書増補節用集綱目	1693
節用集 (同別版)	真草二行節用集 (孟冬版)	1651	頭書増補二行節用集	1681	頭書増補節用集綱目	1694
節用集 (慶長一六年版)	真草二行節用集 (孟冬版別版)	1651	二行節用集	1681	頭書増補節用集大全 (寸原版)	1694
節用集 (草書本初版)	真草二行節用集 (西点版)	1651	頭書増補節用集大全	1684	頭書増補節用集大全 (載田版)	1694
節用集 (同再刻 A)	真草二行節用集	1658	頭書増補二行節用集	1684	万宝節用集*	1694
節用集 (同再刻 B)	真草二行節用集	1659	頭書増補節用集大全 (小野版)	1685	頭書増補節用集綱目	1695
節用集 (源太郎版)	二体節用集	1659	頭書増補節用集大全 (伊勢版)	1685	頭書大成節用集	1695
節用集 (同異版)	真草二行節用集 (無刊記版)	1659	廣益二行節用集	1686	頭書大成節用集 (改編版)	1695
二体節用集 刊記不記	真草二行節用集	1661	増補頭書西点二行節用集	1686	(書名設定不可本)	1695
二体節用集 同別版部分入	真草二行節用集 (増補版)	1663	頭書増補節用集大全	1687	大益字綱目	1696
二体節用集 (嘉久版)	二体節用集	1626	頭書増補節用集大全	1687		

近世節用集書名變遷考

急用問合即坐引	1789	手引節用集大全	1802	満字節用集字選	1811	節用福聚海	1822
森羅万象要字海*	1789	大成正字通	1802	無及節用手紙大全*	1811	早字引大全	1822
新撰正字通	1790	万宝節用富貴藏	1802	懷宝節用集綱目大全	1812	掌中節用急字引	1823
早引節用集(増字百倍)	1790	満字節用集字選	1803	早引節用集(増字百倍)	1812	早引節用集(増字百倍)	1823
字典節用集	1791	新板引方早字節用集	1803	万海節用集字福藏	1812	佛字節用集	1823
節用福聚海	1792	字會節用集永代藏	1804	手引節用集字福藏	1814	農家節用集	1823
早引殘字節用集	1793	早引節用集(増補改正)	1804	早引節用集大全	1814	繪引節用集	1824
早引節用集(増字百倍)	1793	偶奇假名引節用集	1804	早引節用集(増補改正)	5行 1814	增加節用集	1824
早引節用集(増補改正)	1793	長半板名引節用集	1804	早引節用集(増補改正)	6行 1814	早字節用	1825
早引節用集(増補改正)	1793	文節用通寶藏	1804	大方寶節用集字海大成	1815	倭語集悉改大全	1827
蘇海節用集	1793	大全早引節用集	1805	早引節用集(増補改正)	1815	書札節用要字海	1827
宝林節用集*	1793	字引大全	1806	日本節用万歳藏	1815	大益益節用不求人大成	1827
急用問合即坐引	1794	字典節用集	1806	万海節用字福藏	1815	大全早引節用集	1827
掌中節用急字引	1794	早引節用集(増字百倍)	1806	いろは節用集大成	1816	大万歳節用字海大全	1828
満字節用集字選	1794	万代節用集字林藏	1806	字典節用集	1817	早引節用集(増補改正)	1829
万代節用集(増補改正)	1795	長半板名引節用集*	1807	大全早引節用集	1817	早字節用(暹題)	1829
満字節用集字林藏	1795	手引節用集字選	1807	万海節用集字金藏	1818	文宝節用集	1830
繪引節用集	1795	早引節用集大全	1808	万海節用字福藏	此頃	早引節用集(増字百倍)	1830
字典節用集	1796	早引節用集(増補改正)	1809	玉海節用字林藏	1818	早字節用(暹題)	1830
字典節用集	1796	早引節用集(訂正増益)	1809	大豊節用集福海	1818	大宝節用集文林藏	1830
早引節用集(増字百倍)	1796	早引節用集(世用万倍)	1810	倭語集悉改養	1818	篆字節用子金宝	此頃
大全早引節用集	1796	見出給引節用集大全*	1810	和漢音釈書言字考節用集	1818	増補広益好文節用集	此頃
万代節用集字林藏	1797	節用早指南	1810	和漢音釈書言字考節用集	1819	永代節用集無尽蔵	1831
書札節用要字海	1797	増補節用字海大成	1810	早引節用集(増補改正)	1819	字林節用集(外題)	1831
早引節用集(増補改正)	1799	俗字早指南	1810	都會節用集字通	1819	早字節用集(外題)	1832
大広益字尽重宝記綱目	1799	急要節用集	1811	掌中節用急字引	1819	増加節用集大全	1832
大豊節用集福海	1799	字案節用集悉改	1811	都會節用集字通	1819	増補広益好文節用集	1832
倭漢節用集無及養	1799	大全早引節用集	1811	新撰正字通	1822	早引節用集(増字百倍)	1834
早引節用集(増字百倍)	1801	都會節用集字通	1811	節用大全	1822	懷宝節用集	1836
都會節用集字通	1801	日本節用万歳藏	1811			早引節用集(増補改正)	1836
男節用集如意宝珠大成*	此頃	万宝節用富貴藏	1811				

大全早引節用集	1836	早引節用集(増字百倍)	1836	大全早引節用集	1836
都會節用集字通	1836	懷宝節用集	1836	節用大全(新増四声)	1836
日本節用万歳藏	1837	數引節用集(増補改正)	1836	節用大全(新増四声)	1836
字典節用集	1838	和漢音釈書言字考節用集	1836	嘉永早引節用集	1836
懷玉節用集	1840	數引節用集(増字万倍)	1838	雅俗幼学新書	1836
新万倍節用集	1840	早引節用集(寺子節用)	1838	懷宝節用集	1836
文宝節用集	1840	早引節用集(増補改正)	1838	早引節用集(吉田屋版)	1836
和漢音釈書言字考節用集	1840	大全早引節用集	1838	早引節用集(増補)	1836
寺子節用集*	1841	新いろは節用集大成	1839	和漢音釈書言字考節用集	1836
掌中要字選	1841	大日本永代節用集無尽蔵	1839	字會節用集永代藏(合冊版)?	1836
大全節用集*	1841	早引節用集(増補)	1839	字宝早引節用集	1837
二休節用集	1842	早引節用集(早引字會)	1839	日本節用無及大成	1837
永代節用集(早引)	1843	早引節用集(三河・菊地版)	1839	いろは節用集大成	1837
懷宝節用集	1843	早引節用集(菊地虎松里刊)	1839	手紙早引節用集	1838
早引節用集(増補改正)	1843	永代節用集*	1839	増補字海節用大添	1839
早引節用集(増字百倍)	1843	懷玉節用集	1840	いろは節用集	1839
早引節用集(吉田屋版)	1843	早引節用集	1840	早引節用集	1840
早引節用集(三河・菊地版)	1843	万代節用集(早引)	1840	長半板名引節用集	1840
早引節用集*(菊屋版)	1843	字案節用集字金藏	1840	相漢音釈書言字考節用集	1840
早引節用集(天保新刻)	1843	新板引方早字節用集	1841	早引節用集(文江堂版)	1841
大全節用集	1843	早引節用集(増字百倍)	1841	万寿早引節用集	1841
大全早引節用集	1843	字會節用集永代藏	1841	和漢音釈書言字考節用集	1841
大全早字引節用集(播磨版)	1843	節用早見二重引	1842	早引節用集(増補改正)	1842
訂正早字引	1843	早引万宝節用集	1842	早引節用集(掌中)	1842
懷玉節用集	1844	早引二重鏡	1843	萬海節用集	1842
數引節用集(懷玉)	1844	早引通字節用集	1844	江戶節用集(増字百倍)	1843
節用大全(新増四声)	此頃	大衆節用福聚藏	1844	増加節用集大全	1843

国語語彙史の研究 三十一

平成二十四年三月三十一日初版第一刷発行
(検印省略)

編者 国語語彙史研究会

発行者 廣 橋 研 三

印刷所 亜細亜印刷

製本所 渋谷文泉閣

発行所 有限和泉書院

〒543-0037 大阪市天王寺区上之宮町七-六

電話 〇六-六七七-一四六七

FAX 〇六-六七七-一五〇八

振替 〇〇九七〇-八-一五〇四三

本書の無断複製・転載・複写を禁じます